米村みゆき・佐々木亜紀子編

〈介護小説〉の風景

高齢社会と文学

現在の日本の大きな課題はエイジズムとワーキングプアだといえるほど、派遣労働と高齢者問題は、連日、新聞やテレビを賑わせている。前者のシニア世代については、前期高齢者と後期高齢者などと分割され、医療・年金制度等棄老同然の扱いを受けているからだ。

そうした現状にあって、本書はまさにタイムリーな論集といえよう。書名が示す通り、日本の近現代文学を中心にアニメや映像文化にも触れながら、介護する側とされる側の諸問題について、ジェンダーの視点を軸に追究しているのである。本書発行の二ヶ月ほど前に、私も、老いの創造力・老いのエロスという視点から日本の近現代文学を読み解く編著を出したが、こちらが高齢化社会へエールをおくり、夢を与える一冊だとしたら、本書は被介護者や介護者の実態がどのように表現されているのかを抉り出し、むしろ読者に現実の過酷さを突きつけながら、現代の介護のあり方を問う研究書となっている。

六章からなる本論と二篇のコラムを九人の女性たちで執筆しているが、本書の趣旨を語る「はじめに」では、今なぜ介護かについて、示唆に富む卓見がみられる。たとえば、若さに過剰な価値をおいて老いを否定することは、実は近代産業社会の価値基準に基づいていること、生産性や有用性を偏重する近代社会では老いは切り捨てるべきものとなり、その非効率の一典型が高齢者介護の問題であるという指摘。そして今日、いかに介護の問題は社会を照射する鏡であるか、私たち自身の考え方そのものさえ問われることだという。

とりわけ高齢者介護にはジェンダーに関わる諸問題が集まっていると指摘するが、近代になって介護は主婦役割として見なされ家族介護は女性が担わされてきたからである。有吉佐和子の「恍惚の人」は〈職業婦人〉を辞めてまで認知症の舅を介護する嫁の立場からつけようとし、妻自身も主婦に課せられた従来の規範にとらわれ、〈良き嫁〉の意地として介護を受け入れていく。その妻の内面分析といい、舅を幼児と同一視する〈翁童文化〉の装置や被介護者の他者化等、鋭く暴き出している。

女性の視点による介護にかわって男性の視点による老親介護を描いた佐江衆一の「黄落」では、妻を介護から解放させてやるために離婚を提案する〈理解ある夫〉ぶりも、実は嫁の介護を当然視する観念にとらわれていることの現れであり、そもそも母のお襁褓を替えることに戸惑う夫の姿には、身体化されたジェンダー規範が存在していると追究。夫婦の老老介護小説、青山光二の「吾妹子哀し」や耕治人の「天井から降る哀しい音」などには、介護者たる夫たちが認知症の妻たちの現実をそのまま受け入れるよりも、過去の妻への愛の記憶や、妻への罪悪感を救いに妻を聖化することを支えとしていると、理想的介護から断罪している。

在宅介護の出口なき現実を表現した以上の作品に対して、家族介護の根本を問い直す小説としての丹羽文雄「嫌がらせの年齢」、「力を致しつくす」介護を重ね、自己肯定的自己像を獲得していく幸田文の「父―その死―」、自分の居場所探しから新生へと転位を遂げる孫の祖母介護を描くモブ・ノリオの「介護入門」などは、少しずつ出口へと向かっている。「介護入門」の分析は実に鮮やかだが、中島久美子の「介護小説――最後の贈り物」ではさらに、施設介護入りした祖父の世話を通して介護福祉士になるという人生の目標を見つけ、社会的な居場所の確保に繋がっていく。介護の新たな出口を見つけ、担い手も広がって、ようやく介護にも光明がさし、その意義さえ見いだされ始めていることを論者は暗示している。

本書は総じて老いの暗さに視点を向けがちだが、初老の域に達した身からいえば、老いることは若い時には見えなかったものが見えてくる境地に立てることでもあり、プラス面もある。また本書は各論が異なるテーマを掲げてはいるが、同じ作品が重なるなど繰り返しの感もある。とはいえ、若い研究者たちの意義ある取組に心から拍手をおくりたい。（はせがわ・けい氏＝城西短期大学教授・日本近現代文学専攻）

★よねむら・みゆき氏は甲南女子大学教員・日本近現代文学・文化、日本児童文学・文化、アニメーション文化論専攻。著書に「宮沢賢治を創った男たち」「コレクション・モダン都市文化　第39巻　漫画」（編著）など。★ささき・あきこ氏は愛知淑徳大学ほか講師・日本近代文学専攻。著書に「漱石　響き合うことば」など。

まさにタイムリーな論集

介護の過酷な実態を抉りそのあり方を問う

長谷川　啓

46判・304頁・2520円
森話社
978-4-916087-91-1